

エルマンの『ジェイムズ・ジョイス』と
スタニスラウス・ジョイスからの材源

杉 崎 信 吾

Richard Ellmann's *James Joyce* (1959, rev. 1982) and the Materials from Stanislaus Joyce

SUGISAKI Shingo

Ellmann's literary biography of James Joyce has been criticized for relying too much upon the materials from Stanislaus Joyce, the novelist's younger brother. Some say the prodigal image of James Joyce comes from Stanislaus: the sickly genius and spendthrift drunkard who has no sense of gratitude for the younger brother's sacrifice to support him and his family. This paper investigates how Ellmann actually used Stanislaus's "Triestine Diary" and "Letter to his father, 1910, never sent" (both of which we can peruse in the Richard Ellmann Papers, the Special Collection at the University of Tulsa) in *JJ* and compares corresponding parts.

Although the "Triestine Diary" (Jan. 1, 1906 to Feb. 11, 1909) is over 700 pages long, Ellmann apparently had insufficient time to make full use of the material while writing *JJ*. He rather coolly omitted some interesting episodes that did not seem to be related directly to James's life, or those he found too private to be included in *JJ*. However, some such overlooked episodes could cast a light on the relation between the two brothers or on the viewpoint of Stanislaus, making them crucial to our understanding of his witness in proper perspective and fully evaluate the validity of Ellmann's depiction of James Joyce. One such example is found in the entry on July 17, 1907, which tells about an incident deepening Stanislaus's loneliness among his family and relatives.

Behind his devotion to his people, Stanislaus always craved after due appreciation, especially from James and his wife. The "Letter to his father, 1910, never sent" is full of such cravings. It is only 10 pages long (about 5600 words), but is referred to as often as 16 times in *JJ* (while the "Triestine Diary" of 700 pages is referred to 21 times in *JJ*). Though Ellmann was apparently conscious of the danger of using a draft of an "unmailed letter" in his biography, he was so fascinated by the uniqueness of the material that he seems to have used it as a grand design for the Joyce brothers' crucial period in Trieste (fall 1905 to summer 1910) in *JJ*. Comparing Stanislaus's "Letter to his father" with *JJ* in corresponding parts, we find Ellmann adjusting or moderating many details and expressions, considering other source materials or interviews with other witnesses very carefully.

Ellmann does not stop after depicting James Joyce as that sickly genius and spendthrift

drunkard who has no sense of gratitude. He summarizes that “[Stanislaus] allowed himself to rescue and be rescued” (*JJ* 211) and concludes the biography as follows: “[Joyce’s] disregard for bourgeois thrift and convention was the splendid extravagance which enabled him in literature to make an intractable wilderness into a new state” (*JJ* 744).

《特別研究》

エルマンの『ジェイムズ・ジョイス』と
スタニスラウス・ジョイスからの材源

杉 崎 信 吾

序

リチャード・エルマンによる評伝『ジェイムズ・ジョイス』（以下 *JJ*）¹⁾ に対し、弟スタニスラウス・ジョイスからの情報に拠りすぎるという批判がある²⁾。一部にはスタニスラウスの性格の特殊性まで言い立てるものさえある：

Feckless, sponging, wholly egocentric, mooning after women, cavalierly putting off till tomorrow: that was James A. Joyce as Stannie (understandably) saw him: Stannie with his iron sententiousness and his soul of a tax accountant . . . — Hugh Kenner³⁾

Ellmann's entire confirmation of the ant-and-grasshopper relationship comes from Stanislaus. But Stanislaus's perceptions were not objective, no matter what his privileged information. They were colored by his personality, which was as eccentric as his brother's, perhaps more so. Today, even the most casual reader of Stanislaus's diary, letters, and memoirs, would identify his sense of responsibility as abnormally developed. Stanislaus seems to have learned the role of the keeper in Dublin and to have transported it with him to Trieste. He abandoned his role as provider for his drunk father's household only to assume the same role in his brother's household, because a keeper needs a charge.

— Joseph Kelly⁴⁾

(いずれも下線は稿者。以下同様。)

ケナーの言う「鉄のような道学者ぶりと税理士の魂」とは、エルマンが勇敢な奢侈の天才（兄）を描くのに臆病な節儉の凡人（弟）の視点に寄り添っているかに見えることへの不満を表したものであ

ろう。しかし、兄が自家の金銭出納簿に代わるものと認めていたほど詳細な弟の日記⁵⁾は、ケリーが「客観的でない」と批判するのは反対に、トリエステ時代の兄一家と弟の生活ぶりの具体的なイメージを彷彿させる、正に「客観的な」数字の情報を数多く提供している。

一方、*JJ*からの影響とは別のルートで、エルマンに近いジョイス像を形成する人や、*JJ*全編の展望からエルマンの視点の妥当性を擁護する人もある：

After reading the entire correspondence through many times, I find myself unable to shake the feeling that Pound and Joyce were a pair of profoundly mismatched temperaments held together by a common drive to get *A Portrait* and *Ulysses* published. Pound tried to make a friend of Joyce, or at least a comrade-in-arms, but Joyce always kept a frosty distance while helping himself with aggrieved impatience to Pound's abundant energy and good will. All his life Joyce had an uncanny ability to take the measure of another's willingness to help, and he knew just how far to push Pound.

— Robert Spoo⁶⁾

しかし、芸術家としてのジョイスと生活人としてのジョイスの落差はこの伝記のもっとも興味ある側面であり、それはスタニスロースの証言によって書かれる部分に限定されない。彼の証言と無関係な人物たち—シルヴィア・ビーチ、フランク・バジェン、オットカロ・ヴァイス、そしてウィーヴァーすら—も、彼らがジョイスに尽くした多くのことにもかかわらず彼の猜疑心の犠牲となっており、スタニスロースの被害者意識が異常であったとは言えない。

— 宮田恭子⁷⁾

本稿は、スタニスラウスに拠りすぎると批判されるエルマンが、その材源を実際にどの様に使い、また或る部分は使うことを控えたかを検証することを目的とする。それが*JJ*の視点の妥当性について考える手掛かりとなるはずである。対象とする資料は弟が文字通りに「兄の番人・守り手」⁸⁾の役割を演じたとされるトリエステ時代に関わる二点である：

1. スタニスラウス・ジョイスの「トリエステ日記」(Jan. 1 1906 to Feb. 11 1909)
2. スタニスラウス・ジョイスから父への投函されなかった手紙 (1910?)

いずれも遺族の手にある未公文書であるが、タルサ大学マクファーリン図書館 (McFarlin Library, The University of Tulsa) 所蔵のリチャード・エルマン文書の中に、「1」の写真複写と「2」のタイプによる写しを閲覧することができる⁹⁾。

1. 「トリエステ日記」と *JJ*

情報量で評判を取った *JJ* であるが、「トリエステ日記」に詳細な弟の献身ぶりについては、案外冷淡に切り捨てている。例えば、スタニスラウスを狼狽させた、ローマで銀行員として落ち着いたとばかり思っていた兄からの突然の電報：「トリエステに戻る 40 (クラウン)¹⁰⁾ 至急送れ アルティフォーニ [ベルリッツ・トリエステ校長] が (自分の復帰を) 受け入れるか電報で知らせよ」(1907/2/14)¹¹⁾ は、*JJ* では触れられていない。電報を受けたスタニスラウスが翌日、アルティフォーニから40クラウンを借り、それを電信で送金するために更に Santas なる人物から5クラウン借りなければならなかったという事実も、彼の日記以外からは我々は知り得ない。「Santas に近付くのは金を借りる時と返す時だけだ」(1907/2/15) という嘆息は勿論である。40クラウンを受け取ったジョイスは、その2日後には更なる無心を言って寄越すが、弟が、「今度は Guye [ベルリッツ仏語教師] にでも頼むしかあるまい」と2月20日の日記に綴ると、同じ日に兄はローマから弟宛の葉書に、「Try ... Santas or Guye」¹²⁾ と書いているという、この兄弟ならではの暗合も皮肉である。結局 Guye からは借りられず、弟は給与の前借りをして送金する (1907/2/21)。

その後、兄はもう銀行への辞意を取り下げたものと思い始めていた弟は、再度の電報に驚愕する：「arrive eight get room」¹³⁾。兄一家は、電報の通りその日の夕刻、トリエステに戻ったが、それまでの数時間に適当な部屋が見つからず、娼婦街 (the Via delle Beccherie) にやっと一部屋を確保した弟は、自分がそこに入り、兄一家に自分のアパートを提供する。これがスタニスラウスの記述である (1907/3/7)。エルマンは *JJ* で、このアパートの件も省いてしまい、しかも、トリエステ到着の描写から10行と下らない中に、「It was true that he owed Francini money, but Francini kindly took him into his house for a few days notwithstanding.」(*JJ*, 255) という一文があるため、読者は、兄一家が到着の晩からフランチーニ宅に泊まったかのように思うであろう。

スタニスラウスに拠りすぎると批判されるエルマンであるが、ノートブックで700頁を超える「トリエステ日記」を、*JJ* 執筆に十分利用した様には見えない¹⁴⁾。もちろん *JJ* 出版当時とは、遺族や関係者のプライバシーに配慮が必要であったし、日記のカヴァーする3年間余が *JJ* 全体の中で占める量的バランスを考えることも、伝記作者に必要な判断であったろう。しかし、そうした「トリエステ日記」の積み残された部分に、ジョイス兄弟の独特な依存関係、それを綴るスタニスラウスという視点、を理解する上で欠かせない材料が含まれていることがある。

ジョイスがリ्यूマチ熱で寝たきりとなり、妻ノーラにルチアの出産が迫っていた1907年夏、スタニスラウスが家族と親戚の中で味わっていた孤独感を絶望的に深めることになったと思われる或る出来事が、日記に記されている。それによれば、スタニスラウスが兄ジェームズ宛の古い手紙を読んでいたところ、ジョセフィーヌ叔母からローマ在住のジェームズに宛てた一通の中で、自分への手紙では決して見られない率直さで、兄が賛美され、叔母の家では、彼女と子供たち (中でも特にスタニスラウスが恋していた Katsy の名を挙げ) の間で、兄がどんなに懐かしがられ、大切に思い出されているか、更に、自分の名前が比較の対象にされ、彼らの兄への愛が如何により自然で、より真心か

らの、より深いものであるかが、強調されていたという。スタニスラウスは“the sensation of falling through space”とともにこの手紙を幾度も読み返し、たとえ自分がダブリンに帰ることがあっても、叔母の家には儀礼的に立ち寄るだけにし、憎んではいても父の家で過ごそうと決心している(1907/7/17)。ここに綴られているスタニスラウスの深い孤独感は、末尾に嫌っているはずの父のことが言及されることもあって、次に取り上げる「父への投函されなかった手紙」との関係に想像を誘われる。

2. 「父への投函されなかった手紙」と JJ

JJの中で、“a harsh letter which he decided not to send” (JJ 213), “an unmailed letter to his father” (JJ 313), 或いは注で “Letter from S. Joyce to his father, 1910, never sent” (JJ 766) などと呼ばれ、頻りに引証されているものである。タイプ用紙10枚(約5600語)の短いものであるにもかかわらず、JJ中で引証される回数は、注番号の付された箇所だけで16にも上る(「トリエステ日記」は21)。未刊行資料であるため、全文あるいは内容的に纏まりのある部分を直接引用することが出来ないのは「トリエステ日記」と同様である。そこで、注目すべき部分の概略をごく大まかに日本語で紹介しながら、エルマンが明らかに参照していると思われる箇所に下線を付し、必要な場合にのみ、原文のごく短い一節ずつを JJ の対応部分と並べて比較することにする。

既に良く知られているエピソードが続くことから、まるで JJ の梗概の一部を見る様な印象を持つ人があるかもしれない。一方、スタニスラウスの書いたものとしては珍しく、兄の文学活動、政治思想への言及が皆無に近いことから、この手紙の特異な性質に気が付き、エルマンが使わなかった(すなわち下線の無い)部分に、新事実らしきものと同時に誇張や視点の偏りを感じる人もいるだろう。これが「投函されなかった」手紙の草稿であるという事実を忘れる訳には行かない。

[1] ~ [25] の段落は、稿者が便宜のために区切り、小見出しを付けたもので、元資料にはない。JJに使われたと思われる下線部分には、括弧で JJ の当該頁を示した。但し、内容的には JJ と重なっていても、本資料とは別に、より中心的に参照されている材源が在るとされる場合には、下線を省いたところもある。

[1] (的中した父の予言、4年間の総括)：僕がトリエステに行くとき、父さんは、ジムはお前に食わせてもらう気だと言ったね (JJ 211)。覚悟はしていたけど、あれから4年、これほど心無く感謝の念も無くジムとノーラに搾り取られるとは思わなかった。

*

スタニスラウスのダブリン出立を叙述するエルマンの文中、“John Joyce might furnish arguments against his departure” (JJ 211) という一文に、本資料を引証する注が付されているのは、この下線部 (Perhaps you can also remember telling me that Jim wanted to live on me.) を指したものであろう。ジョイス家の中では最も父を憎み軽蔑さえしていたと思われるスタニスラウ

ス¹⁵⁾が、その父に宛ててこれを書き、しかも投函しなかったことは、二重の謎であるが、謎の一部は、この二つの打ち消し合う反対方向の謎そのものが答えている様にも見える。自分に似た長男よりも、自分に似ない律儀者の次男を頼ろうとしていた父は、異郷でのこの兄弟の関係がどうなるか、誰よりも正確に予見していたことだろう。兄夫婦からも二人の妹達からも侮られた孤独な弟は、当時、自分と同様家族の中で孤立していた父の中に自分の理解者を求めたのかもしれない。しかし、求める相手はやはり父ではなかった。スタニスラウスの家族への献身の背後には、相応な賞賛と感謝への渴望がある。とりわけそれは兄夫婦に向けられたものだった。「投函されなかった手紙」にはその渴望があふれている。エルマンは冷静に総括する：“Though in later years he was inclined to view his departure as animated principally by a desire to help James, he could not have done otherwise once the possibility of a career elsewhere had been opened to him. With some trepidation, he allowed himself to rescue and be rescued” (JJ 211).

[2] (1週間の儉約の旅)：トリエステまで、疲労と船酔いの1週間の旅を、僕は2度の食事とコーヒー2杯、卵2個、ビール1本だけに切り詰めてしのいだ。僕がたどり着く先の二人が文無しだと予想していたから。 (JJ 212)

*

全文の内容がほぼそのまま使われている。ダブリンからトリエステまで「一週間の旅」(travelled for a week)を誇張と見たか、エルマンは“after several days of travel” (JJ 212)としている。

[3] (着くや否や所持金を聞かれる)：果たして、二人は1チェンテジモ(1/10ペニー)しか持たず、僕はドアに入って3分と経たぬ中に、いくら持っている、と聞かれた。ここへ来て以来、僕自身に關わることでこれより他に重要な質問はほとんどされたことがない。 (JJ 212-13)

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[4] (給料はそのまま兄の懐へ)：ベルリッツでは週給40クラウン(33シリング4ペンス)だったが、それを学校の玄関を出たところでジムに渡すのが習慣になった。これは僕の過ちだった。これ以上人に親切にすることが僕の人生に無いことを望む。やがて無用な形式を省き、ジムが直接金を受け取り僕の名でサインするようになった。海軍の使い走りの少年でも、自分の週給から自由に使える金は、僕が自分の稼いだ中から得られる金より多かっただろう。劇場へは減多に行けず、服も買えず(僕の良いズボンがジムに取られた)、収支の帳尻を合わせるため、安い社会主義者の食堂を利用した。ジムの週給は42クラウン(35シリング)で、僕のと合わせると、二人で週3ポンド8シリング4ペンスになり、大人三人と1歳児なら快適に暮らせたはずだが、そうはならなかった。 (JJ 213)

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[5] (飲酒, イタリア人一家と同居): ジムは酒を飲み, 僕が彼をベッドまで運んでやらねばならないことが屢々だった。(JJ 213) 家賃を節約して共有の家具を買うため, あるイタリア人一家と同居したが, これも失敗だった。ジムは夜毎1時2時まで飲み歩き, アパートの近くで倒れているか, 僕が探しに行くかだった。(JJ 215)

*

下線部中の「これも失敗だった」(This was also a failure.)は、文脈からは、同居したイタリア人が飲み友達になってしまった様に読めるが、JJでは面白いことに全く反対に“The arrangement worked out well enough.”とされ、飲み歩きとフランチーニは無関係のように書かれている。エルマンがフランチーニにインタビューしたことの影響であろうか。

[6] (離婚の危機を救う): ジムとノーラの喧嘩は絶えなかった。ノーラは、ジムが夜出歩く時は、僕が一緒でなければ信用しなかった。彼女は実家に手紙で訴えようとしたが投函はしなかった。しかし一度, 二人はお互いにすっかり愛想を尽かし, ノーラが子供を引き取り, 分かれようとした。分かれなかったのは僕のお陰だ。僕がトリエステに来ていなかったら, 彼らの冒険はそんな終わり方をしていただろう。

*

ジョイスが自分の才能を理解しないノーラに不満を持ち、分かれることを考えたことは、JJでもジョセフィーヌ叔母への手紙を引用する形で触れられているが(JJ 213-5)、どちらが子供を引き取るという様な深刻な話は出て来ない。スタニスラウスによるこの危機回避への貢献は寧ろ“Stanislaus was able to help his brother and Nora over this crisis, not so much, as he supposed, by the force of his admonitions, as by supplying them with a common target of complaint — himself” (JJ 215). という形で為された、と皮肉な見方が示されている。

[7] (ベルリッツの危機, ジムはローマの銀行へ): 1906年夏, ベルリッツの校長が学校の金を持ち逃げした。オーナーが校長職を引き継いだが, 彼は英語の教師を二人も抱えられないと言った。トリエステを呪っていたジムは喜んでローマの銀行の口を受諾した。ジムが発つためには, 滞っていた家賃と学校からの借金の清算を僕が請け負わねばならなかった(前者は免れたが後者は払った)。ジムが分割払いで家具を買ったユダヤ人がボロ家具を取り返しに来たので, 僕はしばらくの間, 床に寝なければならなかった。(JJ 222-23)

*

下線部の内容はほぼそのまま使われている。但し、最初の下線部直後の、「トリエステを呪っていたジムは喜んでローマの銀行の口を受諾した」(Jim who had always been cursing Trieste was glad to accept a position in a bank in Rome.)という文は、独力で素早く高給の転職先を見つけ、教え子の *Il Piccolo della Sera* 紙編集長から推薦状を取り付けるなど運動してこれを実現した兄の才覚と努力、弟への配慮(スタニスラウスが英語教師以外の転職先を探すのは難しかったであろう)を、

故意に無視したものに見える。JJは、このあたりの事情を公平に説明している。

[8] (高給取りのジムから送金の無心) : ジムは銀行で月給12ポンド10シリングを得 (JJ 222-23), その上、英語も教えたが (JJ 227), 彼の手紙はいつも金の無心だった。ローマは物価が高かったのだ。ジムが秋にトリエステを立ち、翌年春に戻って来るまでの間に、僕は全部でおよそ12ポンドの金を貸した。彼が残していった借金の支払いもあり、手元には本当に僅かしか残らず、食事はアパートにハムとパンと牛乳を買って帰り済ませることが数週間続いた。もちろん服は買えない。学校のオーナーからは僕のみすばらしい様子を注意され、兄さんに送金しているのかと聞かれた。否定したが、嘘を見抜かれ、君にはトリエステの殆どの勤め人に遜色ない給与をあげているのだから、そんな恰好をしていると悪い習慣でもあるのかと思われるよ、と言われた。(JJ 227) そして、兄さんは良い地位を得、自分が望めば更に立派になれる立場にある、とも。古着もくれた。このことをジムに手紙で知らせると、僕が送金した中から2ポンドを送り返してきた。

*

下線を付さなかったが、ジョイスが「2ポンドを送り返してきた」という話の代わりに、JJには：“James offered to send him money. Soon, however he informed Stanislaus that he and his family were all eating enormous meals, even sending a list of what they had consumed in one day.” (JJ 227) と、送金は実行されず、反対に弟を怒らせた手紙が紹介されている。

[9] (兄一家トリエステに戻る) : その後、ジムは手紙で、銀行に自分の未来はない、未来が持てないのでなく取って持たないのだ、と書いてきた。春になったある日、今からトリエステに戻ると電報が来た。その夜、僕は駅で一家を出迎えた。彼らはジプシーの様に汚れ、みすばらしいなりをしていた。ジムは素面ではなく、1リラ (10ペンス) しか持たなかった。(JJ 254) 僕は一家に自分のアパートを与え、自分はトリエステで最下層の地区に泊まった。

*

下線の無い部分であるが、兄一家がローマからトリエステに戻った最初の晩、スタニスラウスが自分のアパートを一家に明け渡したことは、「トリエステ日記」にも詳しい記述があるが (1907/3/7)、JJはこのことに全く触れておらず、寧ろ文脈からは、到着の晩からフランチャーニ家に泊まり、そのまま数日間滞在したように読める。(JJ 255)

[10] (ローマの土産話) : 段々判ってきたことだが、僕のところに戻るようにジムをせっついたのはノーラだった。ジムの飲酒が止処なくなっていたからだ。ローマではほとんど毎晩、ノーラは映画館でジムの帰りを待ち、それから親子三人でレストランに行き (JJ 227-8), ジムはそこで飲み続けたそう。ある晩は二人の郵便局員と一緒に大雨の中をピンチョの丘のダンスパーティーに出掛けた。トリエステに戻る前の晩にも泥酔し、カフェで話をした二人のごろつきに殴り倒され200クラウンを奪われた。群衆の中の彼を見知っていた人たちが家まで送ってくれなかったら、逮捕されていたら

う。(JJ 241-2) 友達に奢るぐらいだから、僕が想像していたようには困窮などしていなかったわけだ。

*

「ローマではほとんど毎晩、ノーラは映画館でジムの帰りを待ち・・・」(Practically every night in Rome Nora waited for him in some cinematograph and then he brought her and his child to some trattoria and remained there drinking.) とあるが、これでは毎晩妻子を映画館で待たせた理由がわからず、ただ飲み歩いていたようにも読める。JJ では、銀行業務終了後の英語個人教授のために遅くなったと理由が示されており、食後も飲み続けたとは書かれていない: “He began to give lessons to a man named Terzini after leaving the bank. Nora would go to a cinematograph with Giorgio and wait for him there until ten o'clock, when they would at last go to dinner.” (JJ 227-8) 200クラウンを奪った「二人のごろつき」(two bowsies) は、アイルランド方言が, “two hangers-on” (JJ 242) と、普通の単語に置き換えられている。

[11] (ジム、ベルリッツに復帰): これからどうするつもりかと聞くと、「教師をする」と言う。僕が、今はちょうど皆がこの暑い町から逃げ出す季節だよと言うと、半ば冗談、半ば真剣に、「それでも、お前がいる」と応えた。夏が近付き、生徒がいなくなることを、彼は良く解っていた。学校のオーナーは熟慮の末、商売敵になりそうな相手を買収しておくことにし、ジムは週給たった15クラウン (12シリング6ペンス) で学校に復帰した。(JJ 255) 当時僕は、週給45クラウン (37シリング6ペンス) もらっていた。ジムは週5～6時間授業をし、夕方からは酒場を巡り、アブサンを飲んだ。彼とノーラの喧嘩を聞いていて判ったが、夜、僕が彼を家に送り届けて立ち去ると、彼はまた外へ出て行くのだ。僕が罵ると、自分は楽しみたいのだ、と言った。僕がどう応えたか想像できると思う。彼は、目下の者から金を借り、いつでも都合のいい時に返すつもりだと言う。

*

下線部の内容はほぼそのまま使われている。ベルリッツに復帰した直後のジェイムズの少ない週給と、持ち時間数で比較にならぬ自分のそれとを殊更に並べて見せるのは、如何にもスタニスラウスが父に訴えたい点なのであろうか。「僕がどう応えたか・・・」(You can imagine my answer.) は、恐らく暴力を振るったということであろう。

[12] (ルチア誕生とジムのリユーマチ熱): ルチアは市立病院の救貧病棟で生まれ、ノーラは退院する時に20クラウンの施しを受けた。それからジムがリユーマチ熱に罹った。法律では、彼はこの地の慈善施設に登録され、病気の場合、医療・介護が無償で提供されるはずだったが、そうはならなかった。ベルリッツ校に違法な手続き不備があったせいだ。学校のオーナーが病気の出費は全て負うと言うのに励まされ、また、二人の賃金を合わせても足りなかったので、僕は学校から借金した。ジムの病気がどれだけ長かったかは忘れたが、その夏は僕には地獄だった。(JJ 262)

*

ここは、下線の無い部分が重要である。リユーマチ熱で倒れたジョイスの医療費を、アルティ

フォーニが全額負担すると一度は受け合わなければならなかった理由が、ここで初めて挙げられている：「ベルリッツ校に違法な手続き不備があったせいだ」(It was one of the illegal irregularities of the school.)と。恐らく外国人労働者に必要な手続きとか、社会保険料についての義務とかを学校が怠っていたという意味であろう。JJには、この学校がジョイスに持たせる契約書の写しを故意に不備にしていたことしか書かれていない (JJ 199)。アルティフォーニへのインタビューで、いわゆる cross-check が得られなかったということであろうか。

[13] (ジム、ベルリッツを去る)：ジムが漸く起きられるようになるかならぬかの頃、オーナーは学校を賃貸しに出した。そして僕の借金への債権も借り主一臆病なフランス人と横柄なドイツ人に売ってしまった。ジムは断りもせずに学校を辞めた。(JJ 262) ジムも僕も文無しだったが、オーナーからの借金をそのドイツ人一六カ月前に不品行で解雇された男で、学校には一銭も入れたことのない奴一に支払うか、法に訴えるかしかなかった。結局その金は、ジムが学校の信用で仕立てさせたスーツの代金4ポンドも合わせ、僕が払い、一方でジムを援助して立ち直らせもした。何しろ彼は初め、週2、3時間しか授業が無かったのだから (JJ 263)。やがて、ジムは自分で生徒を集め始めた。生徒が集まり始めたのを見るや、彼は音楽家を志した (JJ 269)。ピアノを借り、音楽院でレッスンを受けた。これらに加え家具類を調えるのに出費がかさみ、僕は有り金すべてをジムに吸い取られた。節約のため、僕はジム一家と同居していたのだが (JJ 267)。家賃はもちろん僕が払った。ジムの飲み歩く習慣は止まず (JJ 267)。僕が夜10時、11時に帰ると、ジムはアームチェアにぐったり沈み込み、スープ鍋は中味が床にぶちまけられ、ノーラは今や一番身に付いたトリエステ訛で感情を爆発させていた。ジムの眼も彼を悩ませ始めた。リウマチの余病が眼に現れ (JJ 268)。一、二週間、暗い部屋でベッドにじっと寝ていなければならないことが、二、三度あった。英国艦隊がこの地を訪れたとき、彼はまたも乱痴気騒ぎをやらかし (JJ 268)。彼を知る人たちの間ではひとしきり話題になった。しかし、ジムは極めて優秀な男で、イタリア語で講演したり、こちらの一流新聞に論説記事をイタリア語で書いたりもした (JJ 255-9)。以前より虹彩炎がひどくなり、失明の危険もあったが、お陰で自分で節制するのが賢明だと考えたようだ (JJ 268)。

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[14] (借金めぐる衝突)：また夏が巡ってきたが、もちろんジムにはこれを取り切るための蓄えなど無かった。彼の授業は6月には全て終わってしまい、僕の方は学校で変わらない賃金をもらっていた。ジムは、自分の借用書に生徒たちの名前を書き込ませようとしたが、役に立つような額の保証をしてくれる者はいなかった。自分の方が上手く行かないので、ジムは僕に僕の生徒である一人の紳士を利用させようとした。この紳士は躊躇無く、僕に400クラウン(16ポンド)を貸してくれた。(JJ 268)僕は9月から、毎月40クラウンずつ返済することに同意した。9月になり、金は使い尽くされていたが、僕は約束を守りたかった。ジムは全力でそれを阻もうとした。借りた400クラウンは使い

切り、ジムの授業は未だ再開されず、彼は相変わらず僕の給料を最後の一銭まで必要としていたの
で、僕に返済を10月まで延ばせと言うのだ。議論が無益と知ると、ジムは侮辱を試みた。僕の愚かさ
(その点は自分で良く承知している)、僕の教え方、僕の生徒たち、を嘲り、しまいには出て行けと言っ
た。僕は言葉通りに受けとめ、今いるこの部屋を見つけた。それでも、僕が出て行く前にジムとノー
ラ（彼女も僕が彼らのためにしてきたことへの感謝を言葉に表したことはあった）は分別を取り戻し
た。(JJ 270) それは彼らが僕を必要としていたからだ。ジムはスクッサ通りのアパートを押さえ
ていたが、今のアパートの家賃の未払いがあって引っ越し出来ないでいたのだ。大家が家具を差し押
さえると脅していたから。(JJ 268) この件は僕がその額を保障する書類に署名することで解決した。

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[15] (スタン、校長となるもベルリッツを去る)：一方、学校の経営は悪化していた。賃貸し契約の1年が切れたところで、移り気なオーナーは学校を取り戻す決心をし、ドイツ人とフランス人を解雇し、僕を昇給させた(週50クラウン=約2ポンド2シリング)。2、3カ月後、オーナーがスバラトに別の地位を得た留守中、僕は校長として学校を任された (JJ 270)。彼は、1年の終わりにはこのことを忘れない、と約束したが、この見かけ上の昇進は僕に何の利益ももたらさなかった。オーナーは手紙で三、四度、僕に学校を買わないかと言って来た。彼がトリエステに帰ってから直接、同じぐらい頻繁に勧められ、その度に条件は良くなった。この申し出は、僕の校長としての骨折りに報いるつもりだったかも知れない。最終的に、彼は僕に教師として、現状の給与のまま、但し年度末の学校の利益からも数パーセントを受け取り、留まることを望んだ。しかし、僕はもうこの学校にうんざりしていた。時には1日に13時間も働き詰めで、健康を損ねた。その上に、ジムのアパートを整えるために背負い込んだ多くの借金のお陰で、自分の貯金は全く出来ていなかった。僕は契約の終了と同時に学校を去る決心をした。

*

下線の無い部分だが、最初にベルリッツ・トリエステ校を千ポンドで買うことを勧められたのは、トリエステ日記によれば、これより2年程前、ジェイムズ(スタニスラウスの信用という裏付けがあったことだが)に対してであり、乗り気な兄と慎重な弟との間に陰悪な対立があった¹⁶⁾。

[16] (ジムのダブリン帰郷)：夏が近づき、ジムから、お前には休暇が必要だと、ダブリン行きを勧められた。どうせ自分が行くつもりだろうと分かっていたから、僕は言わせておいた。7月、彼は生徒から借金してそちらへ帰省した。(JJ 269-70, 275) 自分の家と妻と子供たちと、それに借金取りたちを僕に委ねて……。アイルランドに着くと、直ぐに帰りたくて我慢ならなくなった。僕への数少ない手紙は、エヴァを連れてトリエステに帰る旅費を送れという、必死の訴えばかりだった。しかし、僕のボスは、僕が学校を辞めるつもりだと分かっていたから、初め思い止まらせようとし、次に契約の期限まで金の支払いを渋った。(JJ 284-5) またしても僕には結構至極な夏となった。ノーラは

1日の多くの時間を泣いて過ごした。ジムの債権者達が差し押さえるぞと脅すので、僕の稼いだ金はそのまま彼らに渡さざるを得ず、僕たちには何も食べ物が無いことも屢々だった。最後に漸く学校のオーナーが給与を払ってくれ、父さんも憶えているだろうけど、その日の夕方6時と7時に、ダブリンのジムに電信で送金した。エヴァとジョルジオを連れ、ある朝、ジムはトリエステに着いた。いつも僕のところに帰って来る時の唯一の姿、汽車の煤で黒く汚れ一文無しになって。ジムはイタリアのある駅から、旅費が不足だから送れ、という電報を打ってきた。僕はその近くの駅の駅長気分で少し余分に送金したが、ジムはそれを受け取れず、荷物を切符代の担保にしていた。(JJ 291) 僕の手元にはもう金が残っていなかったので、送金した分が戻ってくるまで荷物はお預けになってしまった。

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。下線の無い部分で、ジョイスが「直ぐに帰りたくて我慢ならなくなった」り、ノーラが「1日の多くの時間を泣いて過ごした」のは、例のゴガティとコスグレイヴの共謀によって引き起こされた、夫婦の危機(JJ 278-84)が関係していたであろう。

[17] (ジムから感謝無し)：ジムはノーラに積もる話があるらしく、二人で部屋に閉じこもったまま何時間も出て来なかった。彼らは二人で良く外出もした。特に夜にかけて。彼はノーラのために作らせたプレゼントを持ち帰った。それには奇妙な文字で彼の詩の1行が刻まれていた：“Love is unhappy when Love is away.”僕はこれを見て言ってやった：“So is Love's brother.”しかしジムはただの冗談としか思わなかった様だ。彼は僕に感謝するのを忘れていた。そして、本当に僕に伝えることが何も無いみたいだった。僕がいらいらしながら不機嫌な質問を浴びせ続けてやっと聞き出したのが、ダブリンでの彼への熱烈な歓迎ぶりだった。こんな調子で2、3週間が過ぎてから、僕は何気なく聞いてみた：「で、誰も僕の事を聞いてなかった？」すると、「ああ、もちろん、みんなに聞かれた。ものすごくたくさん伝言を頼まれたが・・・忘れた」！(JJ 300)

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[18] (ジム、再度ダブリンへ)：トリエステの映画館の数についてエヴァが言ったことが、ジムにダブリンで一館を開設することを思いつかせた。ひと月も経たぬ中に、この地の出資者たちを募り、彼は再びダブリンに向かった。(JJ 300-1) 再び家と新たな借金を後に残して・・・折しも、英語教授の仕事が忙しくなる季節で、僕は自分の生徒に加え、ジムの生徒を一部引き受けた。朝9時から夜11時まで、自分の時間が1時間も取れなかったと言っても誇張ではない。この数カ月間に僕が得た金額はかなりなものだが、それでも辛うじてやっていける程度だった。ジムはダブリンで1日10クラウン(8シリング4ペンス)使えたのに、クリスマスに父さんが貸してくれた1ポンド(JJ 306)の他には、我々に全く送金して来なかった。ノーラには高価な紙で特別に装幀した彼の詩集を送って来た。彼女には全く理解できないのに。僕はダブリンとアイルランドの絵はがきを半ダースほど頼んでおいた。人からせがまれていて、僕が特に欲しかったものなのだ。ジムはそれを買って来なかった。

眼が見えなくて、ダブリンを発つ前には何もできなかったと言うのだ。確かに、彼は2月以前には授業が全く出来ないくらい眼が見えなかったし、一度ならず自分の家を支えてもらい、新たにこさえた借金まで払ってもらったことを、僕に対して感謝するのを忘れた。しかし彼は、ノーラやここに居るもう一人のレディが頼んだ手袋半ダースは忘れなかったし、アイリーンの汽車賃を送れと僕に電報を打つことは忘れなかったのだ。

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[19] (ジムへの送金を合計すると)：とにかく、彼はいつも通り煤けた一文無しになって帰って来、その後一カ月、寝たきりになった。その間、僕は彼の一家を支え、あくせく働いた。(JJ 308) 父さんは僕が大げさだと思うかもしれない(ジムがそう思ってる様に)。そこで少々具体的な詳細を示そうと思う。11月以降だけだが(ジムが出掛けたのは10月)、僕が稼いだ額は：

11月	23ポンド 8シリング；
12月	24ポンド14シリング；
1月	23ポンド16シリング；
2月	17ポンド (ジムに授業を返した)；
3月	20ポンド17シリング；
4月	14ポンド18シリング；
5月	17ポンド 9シリング；
6月	11ポンド 9シリング。

合計、8カ月で153ポンド11シリングになる。僕は自分の家具付きの部屋代に毎月1ポンド、それに小遣いとして(それらしい使い方はしたことが無いが)8カ月合計で5ポンド使った。それを引くと、8カ月間に140ポンドをジムと彼の妻に与え、僕の得た見返りはこの間の賄いだけ、ということになる。ジムが2月以降に稼いだ金はどうなったのだろうか。

*

エルマンがこの具体的な金額の記録をJJに使わなかったのは、cross-checkが出来なかったからであろうが、数字の信憑性を疑ってはいなかっただろう。

[20] (放恣な生活)：ジムは朝10時か10時半前には決して起きず、一方僕は(3月は)毎朝7時に始動した(JJ 308)。ジムの生徒たちの中には、僕に代わりに教えて欲しいと言う者がいた。ジムは僕ほどには授業を引き受けなかったのだろう。僕が記録したどの月も、ジムの稼ぎは僕より少ない。彼は家に置く色々な物を買ひ、借金を払い(但し家賃は払わない。僕が2カ月毎に払う。)、アイリーンとエヴァに服を買う。特にノーラには、新しい、それも安くないドレスを殆ど毎月。彼は自分のこ

とも忘れない。彼は身なりには不精で、いつも服を着たまま寝ている様な恰好だが、何か自分のためのちょっとした物を買わずに1週間を過ごすことは決して無い。帽子を随分集めたが、どれも感心しない物ばかりだ。娯楽には目が無い。劇場へ行きたくなると（週に3度は行く）授業を延期してノーラと一緒に出掛ける（JJ 309）。生徒が居なくなる夏への備えは全くせず、持っているお金は全てあれやこれやで使ってしまう。おまけに、僕が心底欲しがっている休暇のために貯金するのを妨害する。我々の収入は、慎ましい生活に慣れている我々のような人間にとってかなりの高額なのだが、それだけで月末まで辿り着けることは滅多にない。つまり、最後の4、5日は、もしジム（しょっちゅう）か僕（極めて稀）が生徒から金を借りなければ、食事抜きになるのだ。先を考えない浪費や、ダブリンの映画館での自分の利益への無頓着さに対し、喉が哽れるまで文句を言ったが無駄だった。

*

下線部：「ジムは朝10時か10時半前には決して・・・」（He never likes to stir himself before ten or half past, whereas (in March) I began every morning at seven.）は、JJでは：“He woke about 10 o'clock, an hour or more after Stanislaus had breakfast and left the house.” となり、内容そのものは余り変わらないものの、ものは言い様で二人の起床時間の差を小さく見せようとする配慮が感じられる。もう一つの下線部：「劇場へ行きたくなると・・・」（Whenever he wishes to go to the theatre — which was about three times a week — he postponed his lessons and he and Nora went.）も、“In the evening he could either continue with the lessons or, if he and Nora had decided, as they did perhaps twice a week, to go to the opera or play, he stood outside the door and sent his pupils away.”（JJ 309）と、内容は変わらないように見えるが、良く見ると“about three times a week”が“perhaps twice a week”に減っているのが可笑しい。

[21]（妹たち・その1）：陽気が好くなってくると、ジムとノーラは夜11時か12時まで外で過ごす様になった。しばしば、僕が1マイルかそこら離れた自分の部屋から彼らの家まで歩いて来ると、明かりが消えていて誰もおらず、ベンチに腰を下ろして待たねばならないことがあった。半時間もすると、アイリーン、エヴァと二人の子供達が暗い中をばらばらに歩いてくる。僕が叱ると生意気な返答をした：「私がここに来たのは、ずっと家にいて兄さんの食事を作るためだとも思ってるの？」（JJ 311）この二人は朝11時前には決して起きず、夕方出て行ったら夜の11時まで帰らない。恥も感謝も知らないのは兄夫婦と同じだ。この姉妹に僕の洗濯物を受け取らせ、靴下を繕わせるのは、ヘラクレスの難行だ。

*

下線部：「私がここにきたのは・・・」（“Do you think ... that I came over here to stay in and cook your dinner?”）は、如何にも憎々しげな修辭疑問文であるが、あっさりと、“We didn't come to Trieste to stay in and cook for you”（JJ 311）に改められているのは、エルマンが二人の妹たちにもインタビューした影響であろうか。

[22] (妹たち・その2)：先週の日曜日のこと、僕は9時過ぎに劇場から帰ってきた。1階のドアは閉まっていたがポーターが入れてくれた。僕は階段を登り、鍵穴から覗いたが中は真っ暗。また外へ出るために、寝ていたポーターを起こさなければならなかった。自分のアパートへ帰る途中、アイリーン、エヴァと二人の子供達を見つけた。エヴァは豚肉屋を覗き込み、年寄りの男と話をしていた。アイリーンは店と道路を跨いで立ち、ひ弱に見える子供達二人が少し前をぶらぶら歩いていた。老人は僕が近づくのを見ると背を向けて立ち去った。「誰と話してたんだ」と聞くと、「誰でもいいじゃない。馬鹿みたい」とエヴァ。「こんな時間まで何で子供達を外に出しているんだ」とアイリーンに聞けば、「ああ、帰きなさい、帰きなさい」。僕は二人を呪い、帰路、レストランで一人真夜中の夕食を取った。ここトリエステでジムが酔っぱらいの無頼漢になった時も体面を守るのが難しかったが、今度は、土地の人達とは違う顔立ちで容易に我々の身内だと知れるあの二人がやって来て、ベニス同様に売春婦で悪名高いこの市中を、あんな調子で歩かれては……。僕は25歳の男性であり、夜、カフェのざらつく照明の中をうろついているのを人に見られるのは耐えられない。彼らを待つ時は、路地にそれて、行ったり来たりを繰り返しているぐらいだ。

*

このエピソードはJJに採られていないが、如何にもスタニスラウスの潔癖性を感じさせる話である。

[23] (一人で食べろとは)：あの連中の考えは、何時なりと彼女らが食事を出すと決めた時に僕は食べ、僕の時間を彼女らの都合に合わせるべきだ、というのだ。僕は授業の終わる9時半に自分の夕食を取りたい。ところが、その時間にジムとノーラが家にいる時でも、僕が帰ろうと立ち上がるまではこの夫婦は食卓に着かず、寝室か居間にこもって出て来ないのだ。初め僕は、彼らの部屋を「告解室」(the “Confession Box”)と呼んでからかっていたが、長く続く中にととうとう腹を立て、一人で食べろと言うならレストランへ行く、と宣言した。これは一日、二日しか効果がなかった。(JJ 312) いまいましいことに、金は全て彼らに預けてあり、僕は一銭も持たないので、彼らから離れられないのだ。

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[24] (衝突してもまた元の木阿弥)：今年7月始めのある日曜日、ちょうど僕が立ち上がって帰ろうとした時、いつもの様に彼らは入ってきた。僕は怒り心頭に発し、もう二度とこの場所には近付かないと言った。ジムは食事の時間について議論しようとしたが、ノーラは、「ああ、出て行かせればいいじゃないの」と言ってジムの黙らせた。僕は「そこ」を出た。僕が築き上げようとして、その主人よりも遥かに堅実に、遥かに真剣に働き続けて来た、「その家」を出た。しかし、他にも背景となる事情があった。彼らは僕に金が無いことを知っていて、一方、彼らには翌日1000クラウン(42ポンド)が入ることになっていたのだ。ところが当日、その金は入らないことになった。反対に、僕

は予期せず数人の生徒達から授業料の支払いを受けた。3日経たない中に彼らは手紙を寄越した：「あなたがお金をくれないといけないとジムが言ってますーエヴァ」そして、「お前が金をくれないと我々は餓死だージム」。街でジョルジーに会うと、彼はイタリア語で言った：「きょうはごはんがたべられなかったんだよ。おほえておいてね」。もちろん、この子は僕がいつも金を渡すところばかり見ているし、あの家ではこれがいつもの僕への挨拶なのだ。話を聞いてくれたイタリア人の友人達は、僕が語り終わらぬ中に、あの家で僕が如何に軽んじられているか気付いていたし、しばしば話題にもした、と言った。ある日の午後、ジムが僕の部屋にやって来て、自分たちが間違っていた、とか何とか言った。僕は彼らのところに戻った。ノーラはイタリア人の妻に何か言われたせいでふくれていた。そして、間違いは直ちに再開された。(JJ 312-3)

*

下線部の内容がほぼそのまま使われている。

[25] (ノーラのニュードレス)：今度もおよそ1週間しか続かなかった。と言うのは、ある夕方、ノーラにまたドレスを買う問題が持ち上がり (仕立て代だけで2ポンド10シリング。全部で幾らになることやら)、僕は、今持っているもので間に合わせてもらえないだろうか、僕もスーツが是非とも欲しいのだが、と言ったのだ。僕が未だに着ているのは・・・ (JJ 313)

*

下線部をエルマンは次のように纏めている：“His own clothes grew threadbare as he paid under protest for new dress or other furbelows for Nora.” (JJ 313)

結び

以上見てきた通り、エルマンは、スタニスラウスからの二つの材源の中、「父宛の投函されなかった手紙」の方に、客観・公平を期すべき伝記の材源としては危険なものであることを承知しながら、魅せられ、スタニスラウスがトリエステ入りした1905年秋から1910年夏頃までの実生活上の出来事の流れについては、これを骨子として参照した形跡が認められる。材源そのものの分量、そして未投函書簡の草稿という危うい性質からすると、この扱われ方はバランスを欠くものとして、「スタニスラウスに拠りすぎる」との批判の根拠の一つになり得よう。しかし、エルマンが使うことを控えた部分や、他の証言者たちの視点を容れ、内容、表現に微妙な変更を加えている箇所から明らかな通り、彼はスタニスラウスの性格、特にこの手紙に見られる特殊な視点を意識してこの素材を扱っている。「律儀な弟を食い物にした身勝手で感謝のない天才の兄」が、エルマンのジョイス像の、少なくとも全体ではない。弟は兄を「助けながら自分も助けられた」(he allowed himself to rescue and be rescued) (JJ 211) というのがエルマンによる総括であり、彼は、ジョイスの浪費癖を彼の反骨精神や文学的創意に結び付け、この長大な伝記を次の様に結んでいる：

his disregard for bourgeois thrift and convention was the splendid extravagance which enabled him in literature to make an intractable wilderness into a new state. (JJ 744)

注

- 1) Richard Ellmann, *James Joyce* (1959; Rev. ed. New York: Oxford UP, 1982).
- 2) 既にJJ出版の前後から、J.F.ByrneやWilliam Empsonによるそれぞれの視点からの批判があったとの指摘もある。Ira B. Nadel, "The Incomplete Joyce," *Joyce Studies Annual 1991*, 97-98.
- 3) Hugh Kenner, "The Impertinence of Being Definitive," *TLS* (17 Dec. 1982), 1384.
- 4) Joseph Kelly, *Our Joyce* (Austin: University of Texas Press, 1998), 157.
- 5) 拙論「異郷のアリとキリギリス：トリエステにおけるジョイス兄弟の経済」, 『明治大学教養論集』341 (2001), 75 参照。
- 6) Robert Spoo, "Unpublished Letters of Ezra Pound to James, Nora, and Stanislaus Joyce," *JJQ* 32 (1995), 534.
- 7) 宮田恭子「訳者解説」, リチャード・エルマン著, 宮田訳『ジェイムズ・ジョイス伝1・2』(みすず書房, 1996), 963.
- 8) スタニスラウスの回顧録のタイトルである: Stanislaus Joyce, *My Brother's Keeper* (London: Faber and Faber, 1958).
- 9) 拙論「タルサ大学のジェイムズ・ジョイス資料について: マクファーリン図書館特別コレクションより」, 『エール』18 (1998), pp.127-8 参照。
同「スタニスラウス・ジョイスのトリエステ日記: タルサ大学リチャード・エルマン文書より」, 『明治大学教養論集』324 (1999), pp.25-39.
同「スタニスラウス・ジョイスから父への投函されなかった手紙」, 『明治大学教養論集』335 (2000), pp.61-62 参照。
- 10) 40クラウンはスタニスラウスがベルリッツで最初にもらった週給と同額で, JJに「8ドル又は33シリング4ペンス」(213)との注があるが, これではピンと来ない。週35〜40時間を担当するベルリッツの週給が40〜50クラウン, アパート(27 Via Nuova)の家賃が月50クラウン(1908/10/1)であること, また, レストランでの週毎の清算の際にウェーターに1クラウンのチップを払っていることなどから, 当時のオーストリア通貨1クラウンは, 今日のわれわれの感覚の千円に近いと思ってよさそうである。
- 11) 「トリエステ日記」からの引証はカッコ入りの日付で示す。
- 12) James Joyce, *Letters of James Joyce*, Volume II, ed. Richard Ellmann (N.Y.: The Viking Press, and London: Faber & Faber, 1966), 216.
- 13) *Letters*, II, 220.
- 14) 拙論「ジョイス兄弟とベルリッツ・トリエステ校」, 『エール』20 (2000), pp.156-57 参照。
- 15) *My Brother's Keeper*, 68 またJJ, 136など。
- 16) S. Joyce, diary, April 16, 1907.